

## 再浮上を目指して

湯澤 三郎 Saburo Yuzawa

(財) 国際貿易投資研究所 専務理事

1990年から2009年に至る20年間、世界経済は年平均2.9%の勢いで拡大してきた。成長の担い手は低・中所得国で、殊に最近10年間は平均6.4%という目覚ましい成長を遂げている。この間、高所得国の国内総生産の伸びは平均2%となって、逆に90年代の2.7%平均から減速している。成長率だけをとって各国を俯瞰してみると、思いがけない発見もある。BOPビジネスが脚光を浴びている昨今、予断のない眼で世界の成長マップを点検してみる価値がありそうだ。

最近10年間、平均して毎年二桁成長を記録した「急成長国」は、アゼルバイジャンの17.9%を筆頭に、トルクメニスタン、アンゴラ、チャド、中国、アフガニスタン、アルメニアの7カ国。

次に1990～2000年、並びに2000～2009年の両期間中、年平均成長率の合計の絶対値が10以上という、「高度安定成長国」は、中国の21.5を最高に、カンボジア、モザンビク、インド、クウェート、ラオス、チャド、エチオピア、マレーシア、ヨルダン、パナマ、カタール、チリ、バングラデシュ、ブルキナファソ、コスタリカ、ドミニカ、ガーナ、ペルー、スリランカ、と続く。

一方、1990年～2000年の年平均がマイナス成長で、2000年～2009年が毎年プラス成長を記録した「成長軌道転換国」は、既述のアゼルバイジャン、トルクメニスタン、アルメニアの他、転

---

換幅の大きい順に、シエラレオネ、カザフスタン、ベラルーシ、タジキスタン、サウジアラビア、グルジア、ベネズエラ、キューバ、リトアニア、ラトビア、ロシア、ルーマニア、モルドバ、ウクライナ、ブルガリア、コンゴ、セルビア、キルギス、マケドニア、ブルンジなど。

他方、上記のようなアップダウンを経験せずに、この 20 年間安定した成長を続けた「安定成長国」、すなわち両期間の平均成長率の絶対値の合計が 7~10 の低・中所得国はの数は 50 近くにも上る。

この間の日本の成長率は 1990~2000 年に平均 1.0%、2000~2009 年に 1.1%で、世銀統計 157 カ国中最低位に甘んじた。日本の後にはハイチ（それぞれ 0.5%、0.7%）が控える位である。バブルの崩壊、リーマンショックといったそれなりの背景はあるし、政策の是非をめぐる議論もあろう。しかしながら、海外から日本を見る目は少し角度が違うようだ。

「わが社はハイリターンを追求するから、当然ハイリスクをとる。ハイリスクのないところにハイリターンはない。ハイリスクをいかに最小にするかが経営者の仕事だ。日本の企業はローリスクしかとらない。ハイリターンをとれるはずがないではないか。」

外資系の某社長からサンパウロでこの話を聞いたのは、15 年前のことである。